

二〇二六年度

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、**6** ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は**四十五分**間です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい**。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受験番号・氏名**を問題用紙と解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

聖徳学園中学校

受 験 番 号					

氏 名

1 次の「文章1」と「文章2」を読み、あとの問いに答えなさい。

(※印の付いている言葉には本文のあとに「注」があります。)

「文章1」

美園女子高校（ソノ女）のボート部に所属する飯塚有里は左利きのため、右手の握力が左手に比べて弱いことを気にしていた。

昼休みに、弁当を食べていると、※文緒が首をかしげて見た。

「なんか変」

「右手で食べてる！」

と、※美彩が声をあげた。文緒が心配そうに聞いた。

「有里、突き指でもしたの？」

「ううん、苦手意識の克服のため。左利きでしょ。右手をうまく使えないことが、昔からコンプレックスだったんだよね。ボートって、左右均等に力入れないとだめなんだ」

「ボートまつしぐらだねえ」

文緒と美彩は顔を見合わせて笑った。

県予選の二日後、ボート部では三年生たちの〈引退宣言〉が行われた。この日を最後に、※インターハイに出ることができなかった三年生たち六人が、部活から退く。三年は全部で十二名なので、ちょうど

半分が去っていくことになる。

三年部員の一人一人が、下級生たちを前に、思いのたけを語る。このスピーチはインターハイに出る選手たちも含めて、三年生全員が行うのが慣わしだった。

トップを切って口を開いたのは、副部長の由紀奈だった。

「一番の思い出は、去年の合宿で、真希がカレーライスを思いっきり焦がしたことです。生まれて初めて、辛いのではなくて苦いカレーを食べました」

「人のせいにするか？ 一緒に当番したくせに」

真希のつつこみに笑いが起こった。

「でも、焦がしたのは真希です。あとで大鍋の焦げを洗ったのはわたしだけだね。金属たわしで手がすりむけたよ」

と笑ってから、一転、由紀奈は真顔になった。

「練習も試合も、きついなあ、と何度も思いました。勝てれば嬉しかったけれど、負けた時は、眠れないほど悔しかった。でも、いつでも仲間がいた。何に乗ってるかなんて関係ない。ボート部のみんなが仲間。つらかったことも、こうして振りかえれば、すべてが楽しかったです。

みんなと会えてよかった。一生忘れない！」

由紀奈の顔がくしゃつと崩れ、涙がすーっと流れた。

三年部員が次々にスピーチを続ける。一年以上をともに励んできた二年生たちは、感極まってみな涙ぐんでいた。二年で一番気が強そうな新部長の紗智が、ぼろぼろ涙を流して舞に背をなでられている。部

活を通じて一番思い出に残ったことや、大会での出来事が語られるたびに、間近で見てきた二年生には、その時々（じようきき）の状況が思いだされるのだろう。しかし、有里たち一年は、共有した時間はまだわずかだった。それでも、美帆（みほ）はもらい泣きしているし、感激屋（なつ）の南都（なつ）も麗花（れいか）も赤い目をしている。

こんな時、ちよつと涙目になったりするほうが、上級生受けがいいのかもしれない、と思いながら、さらに一年の様子を見ると、瑠璃子（るりこ）は口を真一文字にして、無表情だった。よく似た姉が静かに微笑（ほほえ）みながら頬（ほお）をぬらしているのとは対照的だったが、有里は、瑠璃子（るりこ）の様子から「絶対に泣かない」という強い意志を感じた。マイペースのはる香（か）といえば、終始にこにこしながら、先輩（せんぱい）たちの言葉にうなずいている。

部長（ともみ）の朋美（ともみ）のスピーチは一風変わっていた。

「わたしとともに（※天狼（てんろう））に乗る四人を含む三年六人は、まだこれからインターハイがありますが、今日を境にして、活動の中心は二年と一年が担（にな）うことになります。来年のインハイ、再来年、きつとわたしたち以上の活躍（かつやく）ができると信じています。ソノ女ボート部の名をもつともつと全国に広めてください。それから、今日から受験勉強（しけんけんぎょう）に突入（とつにゅう）する六人の同期のみんな、部活で培（つちか）った努力する心と体力で、がんばろう。春にはともに笑顔（えがお）で未来を祝福（しゅくふく）したいと思います。密度（こ）の濃い二年とちよつとだったけれど、わたしたちの人生はまだこれからです。しつかり生きよう！」

思い出を排（はい）し、終始未来を語る朋美（ともみ）の目に涙はなかった。

最後は、三年生たちを、※AKB48の（桜（しおり）の葉）を歌いながら送った。選曲したのは美帆で、有里はまったく知らない曲だった。知らないの？ と呆（あき）れられたけれど、インターネットのユーチューブで曲を探して必死に覚えた。AKB48にまったく興味（きょうみ）がなかった有里としては、イメージと違（ちが）って静かな覚えやすい歌だったことにほつとした。歌いながら、入学式（にがくしき）の日に、桜（さくら）の花びらが散る中を登校（とうこう）した時のことがよみがえった。その瞬間（しゅんかん）、有里（あり）は目頭（めがしら）が熱（あつ）くなった。慌（あわ）てて瞬（まばた）きをする。「わたしたちの人生はまだこれから」と語った朋美（ともみ）の言葉をかみしめていた。

引退宣言（いんたいげんぎ）の後（のち）、ボート部の練習（れんしゅう）は変わらない。人が少なくなったとは思（おも）うが、朋美（ともみ）も由紀奈（ゆきな）も、茉莉子（まりこ）も真希（まき）も、変わらずに練習（れんしゅう）に励（む）んでいる。いや、インターハイを目指（めざ）し、ますます厳しい練習（れんしゅう）をこなしていた。

有里（あり）が、※ストロークサイド（stroke side）を注意（ちゅうい）されることは少なくなった。右を意識（いし）するようになったことが功（こう）を奏（そう）しているのかもしれない。といて、有里（あり）の漕（こ）ぎが、格段（かくだん）に上達（じやうたつ）したとはいえない。美帆（みほ）や瑠璃子（るりこ）と比べると、動きのしなやかさで劣（おと）っている。つい、※ブレード（blade）が深く入（い）ってしまうこともたびたびあった。

悔（く）しかった。こんなところで負けたくはない。※エルゴ（ergo）は回（まわ）せても漕（こ）ぐのが下手（へた）、そんな選手（せんしゅ）には絶対（ぜったい）なりたくはなかった。パワーでは一年（いちねん）のだれにも負（ま）けないと思うのに、そのパワーが、どうも空（そら）回りし

ている感じがする。

「飯塚、力むな」

後ろで、佳子の声が響く。^{ひび}美少女らしからぬぞんざいな言葉だが、注意は的確だ。佳子は大柄な選手ではない。^{おのがら}腕力なら有里のほうがありそうだ。だが、佳子のオールからはぐっと押されるようなパワーを感じる。

力んでいるつもりはなかったが、どうも、ほかの※クルーとのタイミングが合わない。合わせようとすると、よけいにぎくしゃくする。一人で、自分のペースで漕ぐほうが向くかもしれない。いつしか有里は、※シングルスカルに乗りたいたいと、強く思うようになった。

気がつくと、有里の目は由紀奈を追っている。ソノ女ボート部ナンバー2の実力の由紀奈は、シングルの選手の中で際立^{きわ}って目を引く。他校の選手と比べても、動きがダイナミックだ。どうしたら、あのように力強く水をつかめるようになるのだろう。

(濱野京子『レガッタ！ 水をつかむ』講談社)

【注】※文緒、美彩——有里の同級生。

※インターハイ——全国高等学校総合体育大会。

※天狼——ソノ女ボート部で用いられている競技用のボート。

※AKB 48——アイドルグループ。

※ストロークサイド——漕ぎ手から見てボートの右側のオール。

※ブレード——オールの先端^{せんたん}にある、水をかく部分。

※エルゴ——エルゴメーター。ボートの動きを陸上で再現するトレーニングマシン。

※クルー——ボートに乗る選手。

※シングルスカル——一人乗りのボート。

【文章2】

「ぼく」とダニエル、杏（あん）は、小学五年生である。「ぼく」は立ち幅跳びが苦手だったが、ダニエルに教えてもらいながら、練習を重ねていた。一方、ダニエルも「ぼく」に一輪車の乗り方を教わり、挑戦（ちようせん）していた。

ダニエルが一輪車を乗りこなせるようになったのは、冬休みの直前になってからだだった。その日はお昼から雪がちらつき、外に出ると息が白く凍えた。できれば延期したかったのに、ダニエルはいつもどおり走ってやってきた。

「今日は成功するぞ。予感、百パーセント」

もう何度も聞いたようなセリフを口にした。こりないんだな。前向きな姿勢はりっぱなだけだ。

ぼくたちが練習を始めると、家の二階の窓から見ていたアンちゃんが公園に出てきた。昔見たことのある、うさぎのような耳のついた帽子をかぶり、手にポットを持って。ベンチはもうないので、ブランコに腰をおろし、ダニエルの挑戦を見守った。

うつすらと白くなりかけた地面に、一輪車のタイヤのあとがいくつもできる。

この日もダニエルは悪戦苦闘の連続だった。一輪車なんて、小さいうちに始めれば幼稚園児でも乗れるのに、大きくなってからだ逆（さか）にむずかしいようだ。

ぼくは肩を貸して、ゆっくり並んで歩く作業をくり返した。たいして体力をつかわないから、手足はどんどん冷えていく。

そのとき、ふっと「※みんなちがって、みんないい。」という詩の言葉思い出した。ダニエルのように、走るのが速い人もいれば、ぼくのように、一輪車ならダンスだってできる人もいる。このままダニエルが乗れなくなつて、それはそれでいいんじゃないか。そのほうが、なんだか安心して友だちでいられそうな気がする。

そんなふうに思っていたときだった。ぼくの肩から手をはなしたダニエルが、そのまま足を着かずにペダルをこぎ続けたのは。サドルの上でグラグラゆれ、今にも倒れそうになりながら、でもなんとか前に進む。

時間にして、五秒くらいだったと思う。

「お、おい。ほら、見ろよ。できてる……みたいだ」

大きなからだをした超人（ちやうじん）が、小さな子どもみたいな声をあげた。つられてアンちゃんも、ブランコから立ち上がった。

「見たか、アン？ おれ、乗れたよな？」

いったん足を着いて降りたあと、ダニエルは何度もジャンプし、宙に高く腕（うで）をつき上げた。

そんなにうれしかったのか。

「サンキュー、コーチ。おまえのおかげだ」

そう言つてぼくとハイタッチをかわすと、ダニエルはすぐまた一輪

車に乗った。

一度からだがコツを覚えれば、あとはどんどん記録がのびる。五秒が十秒、十秒が二十秒、三十秒、やがて一分へ。ぼくたちの前で、ダニエルはまたたく間に上達していった。

タイヤできれいな円を描けるまでに、それほど時間はかからなかった。今までの失敗の積み重ねが※糧^{かて}になったのだ。

「コングラチュレーションズ！」

前にかけてもらった言葉を、今度はぼくがかけた。これでおあいこだ。

——そうだ。このうれしい気分を利用して、ぼくも試^{ため}してみよう。

一輪車乗りをマスターしたダニエルを横目で見ながら、ぼくは砂場の前に立った。

「ホップ、ステップ」とゆつくりつぶやき、「ジャンプ」で力まずに跳ぶ。フワツとからだが宙に浮^ういた。砂を踏^ふむ音がして、全身にやわらかな衝撃^{しょうげき}が伝わった。ぼくの両足はきちんとそろって着地していた。

あ、この感じ。この感じだ！

力んでいないのに、必要な力がしっかり入っていた。

三回、同じことをくり返した。OK。ぼくのほうも、なんとかコツを覚えたみたいだ。感激で胸がいっぱいになってきた。

気がつくと、すぐそばにアンちゃんが来ていた。

ガッツポーズを見せたら、アンちゃんも笑顔になった。

そしてダニエルのほうに目を向け、

「わたしもやってみようかな」と言った。

（本田有明『勇氣を出して、はじめの一步』小峰書店）

〔注〕※みんなちがって、みんないい。

——金子みすゞ^{かねこ}の詩である『私と小鳥と鈴と^{すず}』の一節。

※糧^{かて}——活力の源となるもの。

〔問題1〕 **〔文章1〕**に『わたしたちの人生はまだこれから』と語つ

た朋美の言葉をかみしめていた」とありますが、朋美の言葉のどのようなところが、有里の印象に残ったのですか。

他の三年生の言葉とのちがいにふれながら、四十字以上五十字以内で説明しなさい。

〔問題2〕 **〔文章2〕**の「コングラチュレーションズ!」は「おめで

とう」という意味ですが、この言葉によつて、「ぼく」は、ダニエルにどのような気持ちを伝えようとしたのか、文章中の言葉を使って、説明しなさい。なお解答らんにおさめるように書くこと。

〔問題3〕 **〔文章2〕**に「ダニエルは悪戦苦闘の連続だった」とあり

ますが、ダニエルのように苦手なことを克服しようとする場合、あなたはどのようなことを心がけたいと考えますか。

〔文章1〕あるいは**〔文章2〕**の内容をふまえて、三百六十字以上四百字以内で説明しなさい。ただし、第一段落であなたが考える心がけたいことを八十一字以上百字以内で書き、第二段落に、なぜそれを心がけたいのかの理由を書くこと。

〈きまり〉

○ 題名は書きません。

○ 最初の行から書き始めます。

○ **〔問題1〕**では、段落を設けず、一まずめから書きなさい。

○ **〔問題3〕**では段落を設け、一まずめを空けなさい。

○、や。や」や空白などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じように書きます。

○。と」が続く場合には、同じまずめに書きます。この場合、「」で一字と数えます。

氏 名

受 験 番 号

得	点
※	

※のらんには何も記入しないこと。

〔問題 1〕

[illegible]

50

〔問題 2〕

Downloaded from <https://www.cambridge.org/core>. University of Cambridge, on 01 Jun 2019 at 10:00:00, subject to the Cambridge Core terms of use, available at <https://www.cambridge.org/core/terms>. <https://doi.org/10.1017/9781315326477.007>

〔問題 3〕

[illegible]

20

100

200

300

360

400